

Panizzi, Jewett, Cutter の目録規則と要語索引の概念
The Cataloging Rules of Panizzi, Jewett and Cutter, and
the Concept of Keyword Indexing

中 村 初 雄
Hatsuo Nakamura

Résumé

Many indexes are being prepared by machine, and most of them are developing successfully. Some of them, however, seem to be suffering from poor support.

These indexes can not be evaluated indiscriminately because they vary in form, subject field, nationality and local situation. In order to seek the most fundamental method of evaluation, the writer takes up three important cataloging rules and discusses their relation with keyword indexing and the function of catalogs, which is taken as the basis of keyword indexing. Further, some significant points in those rules with present keyword indexing method are examined.

Among other things, the writer tries to point out the common characteristics among Panizzi's "Index of matters," Cutter's "Title entries" and the concept of keywords appeared in titles, and the so-called non-conventional indexing system.

It is needless to say that it is important to recognize that today's mechanized indexing procedure is the product of endeavour to solve the problem of volume and up-to-dateness. At the same time, in case the output is printed and distributed among users, it is urged to carry out strictly objective and critical study of its value to users.

(Japan Library School)

は じ め に

- I. 目録規則の史的概観
- II. Panizzi の九十一条規則とその意義
- III. Jewett の規則について
- IV. Jewett の簡素化作業観と Panizzi
- V. Cutter の辞書体目録規則
- VI. 主題索引と要語索引の特質

はじめに

図書館関係の用語委員などをしていすると、いろいろと厄介な問題に当面してしまい、驚ろかせられることがある。図書館学といえば、あらゆる分野の文献・資料を取り扱うのであるから、また図書館学は技術革新のあらゆる成果を利用しつつ発展してゆかねばならないのであるから、学問の全分野にわたる用語を網羅して、それぞれに対して解説なり定義をつけてゆくことが望ましいという要望を受けて、気が遠くなりそうになったこともある。幸にこれに対しては、委員間で「図書館・ドキュメンテーションの分野で特に用いられる用語、他の分野でも用いられるが、図書館では特殊の意味に用いられるものに限定しよう。他の分野の専門辞典で正確に定義されているものは、それを借用する方針をとる。」という申合せをして、泥沼に足を踏みいれる危険を避けることが出来た。図書館人たるものはあらゆることに對し、常に知的好奇心をいだいてゆく、ということも重要な資質の一つであるが、他人のやった成果をなるべく利用してゆくという精神も重要である。その次に驚ろかせられたことは、図書館で特に用いられている用語の中にも、沢山あまりにも沢山の「術語」なるものが用いられているという点である。IBM 社の H.P. Luhn が提唱した KWIC 索引 (Keyword-in-context Index) という概念は、非常に重要な新概念であると思うので、術語に採用して、解説もつけたいものと思っているが、これと全く同義語とはいえないまでも殆んど同じ意味に用いている半ダース以上の「術語」があとからあとからと出てきたのである。Permutation indexing, Permuted indexing, permuted title indexing, redundant self-indexed information recording, rotated file, rotational indexing, Selected words in full title, 更には Correlative indexing という用語で KWIC 索引と同概念を表現、またはそれに主眼をおいた概念として用いている人も多いのに気がついた。名称が違ふと、どこかに差違が出てきてしまうが、根本的機能の検索の手がかりという意味でみた場合にはどういふ風に違ふのであろうか。19世紀以降の主として科学技術の分野でみられた進歩・発展というものは、特化とか分化というものと密接な関係にあったものが多いことは事実である。しかしながら、それぞれのものの間に共通な要素を抽出してゆき、一般化の方向をみてゆくことも重要である。それは何も、科学技術の分野とは異なったコースを、という意味ではなく、

人文・社会・自然科学たることを問わず、基本的法則と事実との間には、演繹と帰納のやむことのない繰りかえし、所謂螺旋状展開が行なわれてゆくのであるという、Ranganathan や Shera の言う意味においてである。

シカゴ大学図書館学校の F. Strout 女史は本誌 3 号 (1965) に寄せられた論文 “An inquiry into the Role of the cataloger” (カタローガーの任務の探究) の中で、目録作業とレファレンス奉仕の分離が図書館界にいかにな不幸な事態をひきおこしたかを指摘している、それは 1952 年に P. Butler をして「目録者は、図書館のコースト制における最下級民でアンタッチャブルである…」と言わしめるに至ったのであることを。Butler の言は極端にすぎるかもしれないが、それと似たような批判は何人かの人によってなされているのである。女史は、Bishop, Shera, Ulveling, Lundy などを引用し、また 1964 年の図書館学校の会議 “The Intellectual Foundations of Library Education” の為の L. Carnovsky 論文の中にその根本的原因を見出している。女史自身が主宰した 1957 年の “Toward a better cataloging codes” 研究集会での討議での内容を通し、図書館界、目録者のマンネリズム化、不振をゆさぶる刺激は、図書館界以外からもきているということを指摘している。

Carnovsky は、いわゆる愛書精神もなく、ただ単に選書参考の書誌に重点をおき、自館にそなえつけるべき図書を選択受け入れてゆくのであっては、司書職が知的な職務であるとは主張出来ないと言っている。目録規則を理解して応用してゆく能力は重要に違いないが、それだけではまだ知的職務と認めがたい。読者の期待、要求、主題知識などにも関連させての成熟した判断が下せるようになって、真に知的な職務と言い得るのである。規則とかコードはある目的を達成する為にあるのであって、場合によっては無視されることもあるが、それが如何なる場合であるかを知る手段を身につけてこそ知的職務なのである。こういった能力、というよりも適応性は大学に於ける一般教育の段階でこそ学びやすいことで、専門課程の図書館学に入ってからでは教えにくいことでもあろう。しかしいづれにせよ、このことは図書館司書になるために習得しておかねばならないことであると Carnovsky は言っている。

この間の事情については、Strout 女史の原論文、和文要旨によって承知されている読者も多いであろうが、筆者は女史の論文の最後の節を紹介してそれを筆者の出発点としたい。

機械化がすすんでゆくと、目録者の地位というもの、重要性と影響力を再びかち得ることになる。勿論目録者がその責任をよく果している場合に言えることであるが。〔裏がえしの言い方をすると、専門職とか何とか言っても、機械的・繰りかえしの作業にばかり追われている限り、かつて享受していたような声望はとりかえすべくもないの意〕世間は再び、目録者に対し、その質量ともに最高の創造的努力を要求するようになろう。書誌的問題に関して、レファレンス司書であったなら、制限された、狭い範囲で考えることが許されているが、目録者はもはやそれではいけないことになろう。〔もっと広い範囲で考えてゆくことが期待される。〕専門職全体としてもより広い立場で考えるという関心が衰えてゆくということは考えられない。印刷機械からはきだされる資料の量と、研究の緊急性を考えると、*“図書館の主たる目的は世界的の規模における書誌組織の形成にある。”*ということをも簡単に忘れてしまうことは許されないであろう。

ここにいう“世界的規模における書誌組織の形成”というものがどうすれば実現出来るか¹⁾という問題を包括的に、この小論で述べられるものとは思はない。しかしながらその中の一つの道具として、標題を基礎にして作成する目録記入なり索引記入による検索を論ずることは許されよう。昭和41年度全国図書館大会第13部会第一部でとりあげた問題が“整理のし易さを求めがちの態度で、技術面にだけとらわれ、利用者のことを忘れてはいけない。私達の先人達が目録法の基礎を作り、分類法の原理をまとめたときに、そこには、整理技術の思想があった筈であり、それは今日でも存在する筈である”であったことにもかんがみて諸目録規則を歴史的に回顧し、要語索引概念を再検討することは無駄でなかろう。

I. 目録規則の史的概観

1841年は大英博物館所蔵の印刷本の目録第一巻が発行された年である。目録本体は、刊本部責任者 A. Panizzi の反対にもかかわらず、充分な調整・訂正を経ないで発行されたものである。しかしこの第一巻には、彼が精神をこめて作成した“九十一条規則”がついている。それから10年たつと、大西洋をわたったアメリカでは、Jewett とその支持者達が、スミスソニアン学会に、合衆国全体の書誌並びに文書活動のセンターを創設しようと運動を開始したのである。1853年には Jewett 等により

第一回図書館長合同会議が開かれ、彼の提案、スミスソニアン学会図書館をセンターとし著作権納本を実施し、ステロ版技法による、総合目録を目ざしての目録記入作成の提案が受け入れられた、この提案は残念なことに、あまりにも時代に先んじすぎたものであって、僅か数年の間の線香花火の如き存在におわった。しかしながらこの時に芽ばえた図書館の相互協力という考えは1876年、アメリカ独立百年記念祭の年になって再燃したといえよう。1876年はアメリカに於ける、図書館人のロマンチック時代の黎明と言える。図書館協会の結成をみ、Cutter はかの有名な、“辞書体目録規則”(Rules for a dictionary catalog) をこの機会に官庁出版物として発行、Dewey は協同目録作業の必要を力説した年である。

1908年には、国語を同じくする英国・アメリカ両国の共同で所謂 Anglo-American Code が成立した。(これもくわしく差別をつける人は、そのアメリカ版であると言うであろう。しかしながら英国側の委員 John Minto は“規則は英国版、アメリカ版として印刷される。しかし両者とも、出来得る限り、構成も文章の表現も一致するようにする。”とこの版に書いている。) このことは、後に1961年に目録原則国際会議が開かれて、英米規則と対照的な規則であったプロシア目録規則の支持国の図書館員達も一緒になって、統一見解を発表したことと同様に大きな前進であったといえよう。

Jewett が夢みたところの印刷カードとその配布の組織は、アメリカの議会図書館によって1902年(自館だけの為に印刷したのは1898年)に開始され、Panizzi が大英博物館蔵書目録について望んでいたことは、1942年にアメリカ議会図書館の蔵書目録の第一冊が出版されたこと、およびそれが1946年に167巻で完成したことによって非常に促進されたともいえよう。しかもこの大刊行事業が、詩人館長として令名のあった、A. MacLeish によって行なわれたということ、またその第一巻に書かれた、まえがきの素晴らしさに、我々は注目すべきであろう。

II. Panizzi の九十一条規則とその意義

既に Olding²⁾ も指摘していることであるが、Lubetzky はこの規則のことを“新しい目録に一つの土台石をおいた、”³⁾と評して、Panizzi の功績をたたえている。1839年に編さんされたこの規則は、若干の変更・訂正はあったとはいえ、ほぼ原案通りに、図書館評議員会により承認されたのである。

その後いろいろの批判攻撃があったことは事実で、それらは種々の動機からなされ、英国の蔵書目録作業全般に対し大きな波紋をなげたことも事実である。Lubetzky が、1958年の Stanford 大学での目録規則研究集会の時に、1961年の目録原則国際会議の際にも繰り返して言っていた、Panizzi が100年以上も前に行った反論というものに対して、現在の図書館人が今すこし、理解を持ってくれたら。”という言葉は、非常に深い意味を有する。こういった意味の発言は、一部の国の代表者にはむしろ反撥を与えるという顧慮であろうか、国際会議の場合などでは、アメリカ代表の Wright は特に注意深い言いまわしで発言していた。しかしいずれにせよ、この規則に対する評価は、F. Strout 女史の “…ここにおいて、我々が最新の目録法に到達したのであるということ” は疑いない。現在我々が面している、もろもろの問題が、そのままの形で答えられている場合も沢山みられる。”⁴⁾ という言葉にみられよう。

この九十一条規則の各条についていえば、時代の変遷にともない、変更せざるを得なくなったところもあり、また用語そのものにも変化がみられるが、その主旨・精神からいうと全く新しい考え、今日的のものと一致していると言えよう。

批判・攻撃が集中したといっても、それは第一冊目の大英博物館図書館の蔵書目録 A の部が1841年に発行され、(その中に九十一条規則が掲載されている) 第二冊目以降が続かなかったということに端を発しているといえる。第二冊目以降が続かなかったということは、後述するように、別の理由があったにもかかわらず、一般の人達(知識人たと否とを問わず)はそれぞれの目録記入を作成する規則が面倒なために完成が遅れていると理解したのである。それも勿論一部の理由ではあったであろうが、極く一部の理由にしかすぎなかったのである。簡易化作業を実施した場合、それは一国の中央図書館ともいべき大英博物館の蔵書目録としては役に立たないものになるということ、それはむしろ無駄な作業になるということを Panizzi は示そうとしたのである。目録を作るということは、これだけの労力と時間をかけても、そうするだけの価値がある、ということの認識を深めさせるために査問委員会における攻撃に対して反論したとみるべきであろう。

その経過を Olding は1850年の報告⁵⁾ をたどって、紹介している。その紹介は、Seymour 卿の質問(議事詳録 9703) “いま一つの私が知りたいことは、原稿全体

が完成した後でなければ、印刷ははじめないという態度をあくまでも固執されるか否かである。”にはじまり、目録編さん、目録方針一般、無著者名刊行物、分類目録、主題(事項)索引に関連しての質疑経過を引用して編しう紹介している。その摘録からだけでも読みとることが出来ることであるが、Panizzi の反論は、実に見事であったと言えるが、成功した防衛とは言えない。勿論今日これを回顧してみて、結果論的にいえば達見であったのかもしれないが、彼の反論は、自分のやり方が正しいのであるということを相手に証明するまで徹底的に続け、反攻に転ずるに至るという性質により彼自身の上司即ち主任司書(博物館図書館長)だとか、図書館評議会の事務長には相当手を焼かせてしまっている。上司に嫌がられるくらいことは Panizzi も計算にいれていたのかもしれないが、この態度が査問委員会の事務長の Collier などを敵にまわし、実施に大きな障害となってしまったことは残念なことであったといえよう。それだけにまた我々としては、この大きな犠牲を払わせられた Panizzi の言葉の教訓を十二分に活用することが出来る。

前述、Seymour 卿の質問に対し彼が答えた内容を紹介しておこう。

無論固執します。印刷をさしとめておきましたのは、図書館評議員会にも承認は得てのことではありませんが、私の提案でありました。その理由は、我々が目録作業を開始するにあたり、本来ならば当然含ませなければならぬ管の沢山の著作を除外して目録しておりましたので〔これは別のところで言われている、即ち書架にある図書を片っぱしから作業してゆくという原則を無視してやろうとしたことからの欠陥〕印刷を延期させないで、〔機械的、予定通りに〕発行したとしたら、最悪・不完全な目録になったであろうと予想されたからです。

この種の問答は、Panizzi 以後もこの国でも実務担当者と管理者の間には絶えずくりかえされる問題であった。管理者側の言い分におしきられて、大英博物館の印刷冊子体蔵書目録の第一冊 A の部を1841年に発行してしまったあとで、Panizzi は、図書館評議員会には暗々裡に内諾をとって、第二分冊以降の印刷を延期させていた間のことである。実務担当者としての Panizzi は、この間に草稿の改善をはかっていった。1847年には、“全草稿に手を入れ完成するまでには更に8年は必要であろう

し、それを印刷する迄には更に41年かかるであろう。⁶⁾といった予想を発表したことがある。そしてこれが、所謂“Interminable catalogue versus finding catalogue”論争の発端ともなり、1847年の査問委員会となったのである。

その当時の一般の認識としては、そしてまた、それは今日の日本においても一般的にいえば一步も出ていないと言えらると思うが、一例をあげていえば、第三十八条の規定などで、“前条までのどれにもあてはまらないような無著者名著である場合には、書名の中での最初の名詞を標目として選ぶ。名詞が書名の中になければ初語を標目として選ぶ。名詞ではあるが次の語に対し形容詞的に用いられている場合にはそれに続く名詞と組合せて用いる。形容詞で名詞につながり、これの意義を限定しているような場合にもこれに準ずる。…”といった表現をみる人は、実状と、目録に対する要求を知らない人には、何故このように、こまかい規程を作るのか不思議に思ったことであろう。図書館人とはいわずに、七面倒くさい規程を作ってゆき、自縄自縛におちいってゆくのを、楽しんでいる世にも不思議な人種ではある、とさえ思った人も多かったであろう。

Olding が紹介している Panizzi の反論の詳録から、彼が主題目録というものにどのような立場をとっていたかをみてみよう。

査問委員会は、彼が1836年に言った“良い分類目録を作ることは不可能であると思う。分類目録の計画をするとすれば、各人各様の計画を持ち、決して一致することはない。”をとらえて、分類目録に対する見解をただしている。(議事詳録9866)

この査問内容は既に一度行われたことでもあったが、彼は次のように、忍耐づよく、またもやあまりにも見事に反論しているのである。

…私が以前に答えたことの個々の断片的内容をとりあげて批判されても困る。私は以前には、もっと他のこともつけ加えて申しあげた筈である。それらを総合・統括して御理解された上で批判して欲しい。私の記憶に間違いのないとすれば、私はあの時には、“科学は進歩して、変化してゆくものであるので、いつまでも有効に用いられるような分類目録を持つのは不可能である。”と申しあげた。その次に“二人の人が、分類目録というものについて全く一致したということを知ったためしが無い。”ということも申しあげた。更に

また Dryander の目録について見解を述べた時には“この種のものとしては、今迄に作成(編しう)されたものの中で最も秀れたものである。”といっているが、Owen 教授はその点を見逃しておられる。私としては Dryander にせよ、彼の目録を軽視しようとは口に出したりしたことはありません。そんなことは、思いもしなかったことであります。⁷⁾

Panizzi はこのあとの機会に更に、分類目録に対する見解は以前と変りない、ということを確言している。彼のとった立場は、何も主題目録とか分類目録の必要性を否定したものではなくて、“恒久性もなく、専門家でさえも一致し得ないような計画に則って作業することに時間を費やすよりも、それ以前に為すべきことがある。”と解すべきであろう。議事詳録9862の中では、彼は、次の様に言っている。

…全ての図書に対して目録記入が正確且つ完全に作られた上に、分類目録が編成されるのだとすると、誰でも、例えば博物学についての、または動物学だけについての目録が欲しいのだという場合、分類目録のところにやってきて、そこにある目録記入の中から、自分で〔博物学なり〕動物学と思うものをとりだせばよい。その人は選びだしたものを転写することも出来るし、印刷させることも出来よう。他の主題についても全く同様である。しかしその前提として重要なのは、我々が所蔵しているもの総てについて、正確且つ完全な目録記入を持つということである。そのあとで、それらの目録記入のそれぞれを、科学だとか学問の進歩に寄与するように排列してゆくことが出来よう。そしてその都度、必要に応じて、どの部分の記入をまとめて独立の目録を作ることが一般社会に要望されているので印刷〔複製〕の要否はきめられてゆくべきであろう。⁸⁾

それから Panizzi の考え方で、今日特に新鮮味を感じさせられるのは、このように、分類目録・主題体系のスケジュールといったものに限界を感じたうえで、提案している“事物(主題)索引”(The index of matters)の考えである。これについて彼の説明は、文献語から、しかも標題紙にあらわれているものだけから作成すると答えているのである。

III. Jewett の規則について

さきにも史的概観において触れたように、大西洋の彼方で、Panizzi の規則が論議されている頃、アメリカ Smithsonian 学会の図書館長 Charles C. Jewett は一つのエポック・メーカーな構想をたてていたのである。

Jewett は American Association for the Advancement of Science の *Proceedings*, vol. 4, p. 165-176 (1851) に “A plan for stereotyping catalogues by separate titles; and for forming a general stereotyped catalogue of public libraries in the United States” を発表しているという。筆者の読んだのは、1853年の報告⁹⁾(東大図書館蔵)であって、彼の規則は九十一条目録規則を簡略化したものとも言われているが、規則を遵守するということの重要性については、米国公共図書館の全図書に対する総合目録計画ということを目指にいただけに、Panizzi よりも更に強い信念を持っていた。米国の目録の画一性ということを絶対的不可欠の条件と信じていた彼としては当然のことであろう。

Jewett の報告は表紙標題では On the construction of catalogues of libraries and of a general catalogue となっている。標題紙では and 以下が their publication by means of separate, stereotyped titles. With rules and examples. とくわしくなっており、その第2版となっている。第2版というのは、以前限定版を印刷し、批評や意見を寄せると期待される人々に配布したことがあるので、その方を初版とみなしたというわけである。なおそれより前の1850年8月19日には、学会の Joseph Henry の名で Edward Everett はじめ6名の有力な図書館人に対し意見を求めているから、Jewett の草案は、1850年には既に一応のまとまりをつけていたものとみなせるのである。

上記6名の図書館人は、Henry 教授¹⁰⁾の要望にこたえ、アメリカ合衆国の公共図書館での目録を統一的・一般的なものにする計画を審査する使命を引き受けて、Jewett と何回かの面接、質問・討議を行なったのである。Jewett もこの何回かの質問などを通して、次第に具体的、完全なものにする努力を続けていったのである。6名の図書館人が10月26日に起草した審査報告によると、統一をはかることが如何に重要なことであるかは、十分に認識して、Jewett の案を全面的に支持している。

Jewett 規則の内容を簡単に紹介すれば、次のように記述できる。

第一部は今日の考えでいえば、“図書の記載”と記述とでもいうべきで、12条からなっている。主なる点は、標題紙に表記されている事項を出来るだけ詳細、正確にうつしとるということ、異版はそれぞれ別に目録記入を作成するという点である。そしてその方針は1899年のプロシアの規則なり、Anglo-American 規則に言われていることと同じである。以前の刊行物にはよくあった、標題紙のない図書の場合の取扱いだとか、学位論文、説教録にも触れている。定期刊行物の扱いは現在のアメリカでのやり方と変りない。(§161B, 162A参照) 出版事項については、当時の出版量からいって必要度が少なかったのか、出版者名は記載しなくてもよいことになっている。但し当時既に、no-conflict 方針をとり、同所、同年に異った出版者による同一著作がある場合には出版者名を特記しておくことを注意してあるのは、興味がある。対照事項としては大きさだけが要求されている。用紙の大きさは折りで示し、印刷面の大きさは、吋で高さ×巾の形で示している。例えば 8°(7.3×3.2) の如くである。

現在の目録規則で、図書の大きさを書いておく理由は動機が変ってきているので、外側からの高さだけ、しかもそれを cm 単位で切りあげて記述することになっているのは周知の通りである。その代り Jewett は、頁づけは100頁以内の図書の場合にのみ記述することになっているが、現在の目録規則では、一冊物である限り101頁以上でも頁数を記述して、識別の効果を高めている。

第二部は、第13条から29条迄の標目関係である。図書の識別を可能ならしめる如く、作成した目録記入の本体(それは個々の図書の身代りとも言える)をどのような順序で排列してゆくかをきめるための標目の設定について述べている。今日の目録規則では、標目の選定が第一部となり、それについて、図書の記載・記述が論じられているのとは順序が逆である。内容についての若干の特徴を指摘しておこう。標目での姓は全部大文字で書き、名は()でつづみ小型大文字で続けるといった外観上の変化はみられるが、姓名の形式に母国語形を重視すること、出典を明示して統一標目として選び、参照を準備したりすることは現在の規則にもみられる通りである。接頭辞などを持つ外来の姓名に対する扱い、貴族名の扱い、複数著者による著作の扱い、叢書の扱い、¹¹⁾学会等団体の著作、翻訳書、注釈書、聖書、法廷記録、学

位論文、筆名、匿名による著作の扱い等にも触れている。印刷カードを各館に配布して、統一ある目録編成を計画しての規則であるだけに、現在の日本で直面している問題点をみてゆくのに頗る好い参考となる。

Jewett はその報告で、最初に彼のえがいた目録体系について説明し、その体系を成功させる前提としての目録規則を紹介している。

目録体系の部では、各図書館がそれぞれ独立して蔵書目録を刊行することがいかに困難であり無駄なことだとか、その対策としてのスミスソニアン学会方式の利点を述べた上で、いくつかの問題点を指摘している。

筆者が特に興味をおぼえたのは、その中で目録作業にあたっての、“作業実施者と校閲者の業務範囲（義務）”と題している個所である。^{11a)}

Jewett はここで、一般的図書館即ちあらゆる分野にわたる資料を収集、所蔵する図書館の目録を作成する人に要求される資質の重要性を強調している。性急であってもいけないし、骨惜みや不精でもいけない。正確で注意深く利発でなければいけない。文献・文学の歴史だとか、書誌を知らないのも困るし、古典語は全然知らないとか、外国語も何もやっていないというのでは困る。一般教育とか Liberal education と呼ばれている課程で得られるのが普通であるが、諸科学の概括的知識も欠けているような人に、一般的図書館の目録を作らせようとしてもそれは無理であると言っている。目録者なり、司書にいかなる資質が要求されているかということは、二十世紀後半になって多くの人々によって述べられ、列挙されてきているのとあまり違いはない。

しかし重要なことは、その次に、Jewett が言っていることである。

…どんなに才能があり、造詣が深く勤勉であっても、一般大衆や委員会の人達が屢々望んでいるような速さで作業していったら間違いをおかさないとは言えないのである。他の分野でどんなにすぐれた知識を持っており、分別のある人であっても、目録作成ということに経験のない人達はどうしてもこの目録作業というものを軽く見てしまい、不当に高い速度を期待してしまうのである。といっても一体図書館で目録作業をする場合の、ノルマといえばどれ位が良いのか、ということは回答不能である。それを言うためには、どれだけの作業を含めて考えるかを正確に知っておかねばならないからである。〔そしてそれを知っているのは

当事者の筈であるが、その当事者は諸種の理由から客観的な発言を妨げられていることが多い。〕現在のところ、最善の、または満足すべき標準とでも言うべきものは、大英博物館、フランス国立図書館その他の大きな一般図書館における目録作業進捗状況をみることで推察されよう。永年の試みの結果言えることは、“最良の資格を持ち、実務経験も長く、分業などが理想的に行なわれている組織の中で、参考図書も充分備えつけてあり、機械的な作業などは、必要に応じて助手に手伝わせることが出来る場合に、一日平均40-50¹²⁾の目録記入を作ることが出来よう。”といった程度であるといえよう。

Jewett は更に筆をすすめて、規則も制定せず、充分な予備目録作業もせず、ただみせかけの能率をあげて行なうノルマ作業の危険性を指摘している。そしてそれを外部の人に説明するのに、Panizzi が査問委員会に対しておこなった反論を引用している。そしてそれは実に賢明なことでもあった。Panizzi の時代にはすぐには受入れられなかった反論であったが、大西洋をへだてた、新興国アメリカに於ては、相当の説得力を持っていたのである。

IV. Jewett の簡素化作業観と Panizzi

Panizzi の反論に関して、Edinburgh Review 1850年10号に記事となったことを、Jewett は次のように読みとっている。そしてそれを自分の報告の中に引用して、E. Everett 等の判断を乞うている。彼は書誌情報センターとしてのスミスソニアン学会を夢みていたわけであるから、書誌学的にもなるべく完全な記入を必要としていたので、所謂 finding catalog というものは信用していなかったわけである。

大英博物館の管理運営についての査問委員会ができ、その事務長になったのは J. P. Collier¹³⁾ であったが、彼は、独自の考えで、従来の目録だとか、目録規則といったものにはとらわれずに、“大英博物館の図書目録はかくあるべし”といった見本を作ることを試みた。その目的で Collier は自分の書斎にあった、良く知っている図書25種をとりあげ、わずか一時間のうちに目録記入を作りあげたのである。その25組の目録記入が Panizzi に渡され、“この作業をどう思うか、忌憚なき批評を”と求めたのである。

既に述べた如く、Collier は議会という権威をバックに

しているばかりでなく、古書籍協会、シェクスピア協会、Camden 協会¹⁴⁾ その他王立文学協会にも多数の友人を持つ名士である。その Collier の挑戦を受けて、Panizzi は次のような解答をしたのである。もっともこの回答は、彼が直接作成したのではなく、前任助手の Jones に評価させた結果として報告されている。¹⁵⁾

これらの25組の目録記入は、図書を目録にとる際におかし得る殆んど総ての誤謬を網羅しているといえよう。また図書を簡潔に記述しようとする立場から言及し得るあらゆる異議申立ての種子を含んでいる。それらの諸欠陥を分類すると、次の如くなる。

1. 記述の不正確、不充分。これではその著作の性格・状態を誤解させるおそれがある。
2. 編者の姓名をぬかしてあること。これでは、特定の著作の種々の版がある場合にどれを選んだらよいか手がかりがつかめなくなる。
3. 著者の姓だけで、名が除外されている。同姓の著者が沢山いる場合に困る。目録が大きくなるに従い、混乱は増すことになる。
4. 注釈者の姓名が除外されている。
5. 翻訳者の姓名が除外されている。
6. 版次の省略。著作〔刊行物・資料の意味で用いている〕の価値をきめる直接の最重要な証拠に眼をふさいでいる。
7. 著者名が標題紙にあるにもかかわらず、編者名を標目にとっている。
8. 著者名が標題紙にあるにもかかわらず、翻訳者名を標目にとっている。
9. 標題紙に出ているからという単純な理由で、標目として書名だとか著者名を選んでしまうこと。このやり方に従うとすれば、ロンドンのビショップの著作〔前 6 項 参照〕は Blomfield だとか Chester 又は London の所に分散されることになり、Ellesmere 卿の著作は、Gowan だとか Egerton の所にも現われることになる。
10. 標題紙の言語を用いないで、英語その他の言語を用いている。
11. 無著者名著作だとか、頭文字だけで公刊した著作に対しては、推定著者名を標目にとっている。このやり方で目録記入を作るとすれば、目録をとった人と同じ情報を持っている人に対してしか役立たないということになる。また、目録者があら

ゆる無著者名著作、頭文字だけで公刊した著作について著者を知っていない限り、目録記入の統一ということは考えられないことになろう。

12. 文法上のあやまり

13. 図書の大きさについての記述のあやまり。

これら13種のあやまりが、25組の目録記入の中にみられるが、あやまりの数は一組に2よりも多いということになる。しかも相当数のあやまりが、この目録記入を図書から離してしまった場合に、どの図書を指していたのか判然としないような致命的な欠陥を有するのである。例えば Collier 氏はオディセーのある版を、その図書はラテン語であるにもかかわらずあたかもギリシヤ語であるかの如くに目録している。Collier 氏作成の目録記入を見ただけでは、このような失敗は気がつかないであろう。〔Panizzi が躍起になって、一種の執念をもって、異版を探し求めたあげく、結局 Collier 氏にその図書の提示を求めて、間違いを発見したということである。その刊年に同サイズで Oxford から出版された図書は一つしか存在しないことが判明したのである。〕Staël 夫人の著作『フランス革命』についての図書はパリーで1818年に2回出版されている。Collier 氏の目録記入ではその版種については何も述べていない。〔我々の常識からいうところのような場合〕この目録記入は2版であるというよりもむしろ初版であると推察するのである。「目録記入の誤りは、その記入をよく点検・精査してゆけば除かれる」というのは、現場の図書とつきあわせながら点検しない限り有名無実のことになってしまう。今述べたように、一人の教育のある紳士、研究の経験も、図書一般についての知識も持った人の行なった実験、しかも彼自身の書斎から選びだした25種の図書について、最も基本的・容易な記述ということではじめた実験の結果から、これと同じようなやり方で行なった場合どのような目録が出来あがるであろうかを想像してみよう。10人の人が約60万種の著作、あらゆる学問の分野にまたがり、種々の記述上の困難が生ずることを予想して考えてみよう。25種の目録記入でおこった間違い、1点当たり2を超えた数ということで60万部に対しては130万〔sic〕を超える間違いということになる。しかしこれは間違いをおこす率が一定と仮定してのことである。実際は部数が大になればなるほど、その率は高くなるものであることを忘れてはならない。大きくなるに従い、それぞれの目録記入を排列してゆ

く際にとか、それらを印刷してゆく際に、不可避免的に加わってくる間違いというものが加算されてくるからである。結論として申しあげられると思うが、Collier氏の計画が不適當であるということを証明するのは、Collier氏自身でされた以上に効果的には出来ない、ということである。更にまた私は何等、攻撃〔罪科をあげて攻めてゆく必要もなく〕することなしに、言い添えることが許されることを望んでいます。現在〔即ち査問委員会からの挑戦を受けているという状態〕でなくて、他の状態の下に、これらの目録記入の例を示されたとしたならば、この実験は、簡単な図書目録を大急ぎで印刷してゆくという計画は、言うのは容易であるにしても、無理なものであるということを証明する為に行なわれたものであると理解されたことでありましょう。

今や攻守所を変えた形になってしまったわけであるが、Collier氏はこのPanizziの意見、乃至Jonesによる非難に対しまともな解答はしなかった。ただわずかに、総てをPanizziの規則というものにあてはめて論評するというのは図書館人の悪い癖であり、一般文化人には不当なのではないかといった意味のプロテストを行なっただけである。

私の意図したところは、英国らしい目録の方法を提案するということにあった。これは、Panizzi流の外国式〔彼は亡命してきたイタリー人〕目録法とは正反対のものである。彼の方式は、進歩のない、いやむしろ退歩してゆく国々、啓蒙主義思想の欠陥が最も悲しむべき結果を現在呈しているような国にとっては良いのかもしれないが、探究心が活潑であり、教育が日をついで拡大されてゆき、その結果幸福と平安に恵まれている我が英国には全然不向きなのである。従って、私の提案した方法の目録記入を、Panizziの規則にてらして、試験するという程たわけたことはないのである。私は彼の規則など全部捨ててしまい、無視してゆくのである。¹⁶⁾

この論法は、論理学でよく言われている、Sophismata extra dictionemの典型ともいえよう。その内容から分析してゆくと、不当理由(false cause)を含むとか、論点窃取の誤謬(fallacy of begging the question)であるともみられるが、不適中の誤謬(fallacy of irrelevant

conclusion)をおかしていると見るべきであろう。不適中の誤謬とは、¹⁷⁾「正しき論理的根拠によらずして、相手方の人格とか、公衆の感情とか、相手方の崇敬心とか、威力に訴えて相手を屈服する…」と言われているが、まさにその通りである。Edinburgh Reviewは更に次の如くに続けている。

我々もまた、Collier氏同様に英国人である。しかし一点につき2プラスなにかの誤謬を含む、不良書誌〔25組の目録記入のことを指す〕というものと、進歩だとか啓蒙思想とが本質的に結びつくものとは考えない。…〔勿論〕Panizziの規則とて、万能ではないので、そしてそれは他のどの規範とて同じことであって、いくつかの欠点を有するのであって、そしてその欠点にはそれ自体悪いことと、善悪の問題ではなく、契約違反であるが故の欠点と二種類あることを知らねばならない。Collier氏は書誌の精神・趣旨から離反していることを「Panizziが便宜主義でいろいろと規則を作っているのなら、私だって勝手に違ったやり方をしてゆく権利がある。」といった申し開きをしている。Collier氏は著者の名をおとしてみたり、著者の代りに訳者の方の姓名をつかってみたりして、「私は何も外国風にPanizziの規則に従う必要はない。」と言っているのである。偽の推理を防禦しようとして、アリストテレスの規則を否定する屁理屈にも比較されるのである。¹⁷⁾

目録の規則というものは、たとえどのように、詳細に作られていたとしても、あらゆる場合にあてはめられるものではないのである。適用にあたっては必ず、疑点だとか、難点が出てくるのは当然なのである。その意味で「はじめに」紹介しておいたCarnovskyの言葉を解すべきであろう。たとえば書名を省略するといった場合でも、日本目録規則1965年版、第90条第3項の「副書名および別書名は、書名のつぎに記載する。ただし、副書名の長いものは一般注記に移して記載する。」とあるが、この表現で、どんな目録者であっても常に一致した適用が出来るであろうとは、目録規則改訂委員の誰一人として信じているわけではない。その条についている注についても同様なことが言えるのである。我々が問題にしたのは、この表現が以前の規則1952年版第86条の「…副書名、別書名は書名のつぎに記載する。但し長過ぎるものは一般注記に移すことができる。」と較べて、どちら

が判りよいのか。また他の規則とあわせ考えた場合に、すじが通っていると一般に認められやすいかである。また第96条の冠称についての旧規則と、新規則での前述注の扱いを比較した場合に、実質的にはどう変わってくるか、またどちらの方が理解されやすいかが問題である。Jewettはこの点についてハッキリと、“このような場合に、いくら規則の範囲で解決しようとしても無理で、二人の目録者が完全一致することはめったにない。”と言っている。であるからこそ、全部にわたって、唯一人の監督者・校閲者が必要であって、その唯一人の人が全部を通してみてゆくことを可能ならしめるような協力者即ち目録作業実施者の配置を主張しているのである。図書館によっては、予備目録者と称しているところもあるかもしれないが、何一つ省略することなしに、正確に写しとっておいたり、注記を活用して、書名には明確に出てこない特徴を明瞭にさせておくとか、精密、杓子定規に転写した書名（標題）の中で、彼が省略してもよいと考えるような部分は指示しておいたりして、監督者に検閲を受けるのである。監督者としては、総ての規則が守られているか否かを検討し、省略乃至追加を決定して、印刷指定をした上で印刷者にわたす。勿論その後の校正、最終訂正をするのも監督者の責任である。

これらを、あまりなげやりな作業ですますのでなく、責任ある人に、しかも責任持てる体制を確立して実施してゆくという精神からの提案が所謂 Stereotyped titles の構想となったのである。勿論、最初からなげやりな気持で作業をしようとする目録者はいないであろう。しかし多くの資料を、限られた時間内に、¹⁸⁾ ノルマまできめられて、消化してゆかねばならない状況にあっては、Jewett がさきに言ったことは当然である。しかもその手間をどこでもかしこでも、繰りかえし繰りかえし行なっているのである。出来あがりの目録記入そのものを見れば、一見何の苦労もないようにみえる。Collier の如き書誌に通じた学者であっても「こんな程度で結構間にあう筈である。」と誤解¹⁹⁾ される位単純なものが多いのである。むしろ、誰にも判りやすい様に簡単な形にしようとするところに苦心が必要なのである。この苦心の程は部外者には理解されがたいということが、目録記入作成という責任感を次第に稀薄ならしめていったとみるべきであろう。Jewett が我々に与えた教訓というのは、一機関で、最大の努力を払って責任ある目録記入を調製してくれれば、そのあとの機械的に複製したり、配布したりすることは、別途考慮して、解決してゆけるという

ことであった。そしてこの教訓は我々に、相互協力による目録作業という方向づけをしてくれたのである。しかし Jewett が最初に夢みていた、Smithsonian 学会をして、学術的の資料センター、情報清算所たらしめることは成功しなかった。勿論、1853年にこの提案が受け入れられて以来、学会の集書は、版權納本などもあり、6年間に3万2千冊に増加という、当時としては大きな成果を得たことも事実ではあるが、永くつづく成功はもたらさなかったのである。

理由はいろいろに取り沙汰されてはいるが、その最大の理由は“二つの全国的図書館を持つことの無駄”であったと筆者は考える。内国書と外国書と分担しているイタリーの様な場合、それからまた現在のアメリカに於ける如くに主題分野で分担してゆくことは実行可能であったとしても、全主題分野にわたる大図書館を二つ維持してゆくことは、事情が許さなかったものと思う。また議会図書館の蔵書がすでに相当の規模に達してしまっていたことも、Jewett の悲願をしてみのらしめなかった所以であると思う。²⁰⁾ しかしその後の議会図書館の印刷カード奉仕とか、総合目録計画、協同目録作業等の一連の奉仕をみてゆくとき、Jewett の夢は100年後に実を結ぶにいたったともみられるのは“史的回顧”にも述べたことである。

V. Cutter の辞書体目録規則

アメリカの図書館界に大きなエポックを画すことになった1876年に Charles Ammi Cutter は Rules for a dictionary catalog (辞書体目録規則89頁)を発表した。アメリカ図書館協会創立の際の今一人の主要人物 Melvil Dewey が十進分類法42頁を最初に公刊したのもこの年のことである。当時 Dewey は25才、Cutter は39才、新進気鋭の青年と、Boston Athenaeum での豊かな経験を身につけ苦勞人・常識家との組合せが、アメリカの図書館運動を成功に導いたものである。

辞書体目録規則の生みの親である Cutter のことは屢々、分類目録の唱導者であるかの如くに伝えられることがある。それは根拠のないことでもなく、事実彼は、今日のアメリカ議会図書館分類表の基礎ともなった所謂展開分類表を発表しているし、“分類目録は確かによりよい、またより正確な形式である。”ことを感じていたのかもしれない。そのことについて L. Jolley が、The Principles of cataloguing (London, 1960, p. 115) で想像していることもうなづけることである。しかし筆者

としては、あくまでも Cutter を徹底した実務家として理解してゆきたい。²¹⁾ 彼の心中には、辞書体目録（特にその中の件名目録）対分類目録の品定めをするといった気持はなかったと思う。どちらにせよ、それぞれの条件下で、より適切な目録を求めてゆくということに熱中していた人なのである。前述の Panizzi の分類目録観を知った人にとって、Cutter のこの態度を理解することは容易であろう。そのつもりで彼の発言を読んでゆこう。

体系順即ち分類目録というのは、図書館に所蔵してある図書を学問の分野に準じた排列にしておけば、徹底的な調査をしようとする人にとっては最も役に立つだろうという信念によって編成されるものである。辞書体目録は別の目標を持ち、別の方法で編成されるものである。参考質問、特に詳細・特定の主題に関しての、すぐその場で解決のつくような迅速参考質問などに応ずることが出来るということを目指している…²²⁾

いくら良い方法、形式であるということを感じていても、その実施に困難があったのでは、時機を待たなければならないのである。常識家 Cutter が融通性あり伸縮自在の人物であったことは周知のことであるが、彼はその著作の中に、いろいろと皮肉を含んだ表現もしている。“無限の労力を投入してそれをやったとしても、それに見合うだけの効果を得るようなチャンスは少い。”“例外などのない簡単な規則であれば、それを道具として作業してゆく我々目録者にとって非常に好都合であるのは勿論、同時にまたその目録を使ってゆく一般大衆にとっても使い易いものである。”“その当時にもあったものもろの完全主義論者達の認識をあらためさせるために、根気強い説得を続けたのである。一般大衆にもわかりやすい目録規則を制定して、目録利用の開発をはかるということは最近の国際目録原則会議においても、重要な了解事項の一つである。

Cutter の考えていた目録方針の根底にあるものとしては

明細度 (Specificity)

慣用の尊重 (Usage)

参照付 (Syndetic)

の三つがあげられているが、彼は件名標目による主題目

録の主唱者であるだけに、明細度といっても、段階的に順次進んでゆく体系目録に於けるそれを指しているのではない。いわゆる直接的という違った接近法で明細度を得ようとしているのは論をまたない。ここで直接性 (Directness) を望んでいるのは、一般大衆に対する参考奉仕、あらかじめ準備してある記入の組織によって迅速な回答を与えるということの方に重点をおいているからに外ならない。²³⁾

慣用の尊重ということは、明細度とも関連して論じなければならないことであるが、Cutter は、“検索者が一番最初に思いつくような形”ともいっているが、最も端的に、具体的に思いつく用辞、しかも多数(残念ながら、比較的多数である場合も含ませねばならない。)によってということ期待している。²⁴⁾

参照付という方針もまた、Cutter 当時には、特定主題に関心を持つ限られた利用者という範囲よりも更に広範囲の一般大衆に対する奉仕、しかも多数を相手にという必要から当然おこってきたことである。この反意語ともいうべき参照無し (asyndetic)²⁵⁾ 目録というものは、検索者が一番最初に思いつく形というものが、相当程度統一されていると期待されている場合に採用されるものである。そして今日に於ては、この期待は、たとえ主題分野を限定していったとしても、次第に薄くなってゆくのである。あらゆる検索者に対して満足を与えるような完全な参照をつけてゆくということは無理であることは自明であっても、参照付にすることは、専門図書館にせよ、ドキュメンテーション機関にせよ当然の傾向となってきた。

Cutter がその辞書体目録規則に明らかにした目録の目的というのは、いろいろと批判的とはされたが、しかしそれをそのまま引用、支持した人も多いのである。1876年の初版をほとんどそのまま、2版から4版(1904)まで踏襲しているのはそのためである。参考のために引用しておこう。

1. ある図書を探し出すのを可能にする。その図書については、探す人が次のどれかを知っていることを前提にする。
 - (A) 著者について知っている場合
 - (B) 書名について知っている場合
 - (C) 主題について知っている場合
2. その図書館にどんな図書があるかを示すために。その際も条件でわけると

- (D) 特定の著者によって作成されたもの
- (E) 特定主題についてのもの
- (F) 特定の(文献)種類のもの
- 3. いろいろと図書がある中から特定の図書を選びだすときの補助(参考)資料として
- (G) どういう版であるか
- (H) どんな性格(文献の性格又は論題としての性格)であるか²⁶⁾

上記の件に関する最近の解釈については既に報告²⁷⁾があるので、その意義などについて論じるのは避けるが、すくなくとも Cutter の論じていたことが、今日的意義を持っておるということを示すことだけ紹介しておきたい。

この会議で論議してまとめられた統一見解

“説明おぼえ書き”(Resolution I. Statement of principles)は最近略称“巴里原則”(Paris principles)の名でも呼ばれることが多い。Anglo-American Code 1908 並びにそれから誕生した規則に慣れた国、独逸系の Preussische Instruktionen 支持の国、更にまた新興国を加え 53 ケ国からの図書館人の他に 12 の国際機関からの代表者を加えて10日間にわたり熱心に審議した結果である。国際団体の代表者の中には、FID, FAO, IAALD(農学司書ドキュメンタリスト国際協会) ISO/TC, Unesco(図書館・ドキュメンテーション・アーカイブ部)等からの代表者もあり、投票権を認められていたのである。

その際に61対0(棄権2 デンマーク、フィンランド)で承認された、目録の機能に関する統一見解を紹介しておこう。

2. 目録の機能

目録というのは、以下の如きことを確かめるための効果的な用具である。

- 2.1 その図書館がある特定の図書を持っているかどうか。この場合その特定の図書とは、a. 著者並びに書名によって、b. 著者が記載されていない場合には書名のみで、c. 著者名も書名もどちらも、その図書の認識・識別(identification)に不適当である場合にはそれ以外の別な、書名に代わる語で特徴づけられるものである。
- 2.2 その図書館には、a. 特定著者の著作としてはどんなものが、b. 特定著作のどんな版があるか。

ここに述べられておることは、今述べた、Cutter の規則での“目録の目的”の中に含まれていることがらである。国際会議の際には主題に関係することは論議の対象外にしたために、Cutter が列挙してはいるが、おぼえ書の方には含まれていないことはあるが、1961年のおぼえ書で触れていることは、原則的には、1876年の時点において、Cutter が既前列記していたことなのである。90年以前に Cutter がこの問題をどのように解決してゆこうとしていたかを現代の方法と対比させてみると、次のようになる。

筆者が本稿にとりあげるのは、Cutter があげている(A), (B), (D), (G)を主とし、一部(F)と(H)に触れる程度にとどめる。

理解を容易ならしめるために、最初に Cutter が用いた語についての説明をしておく。Cutter は当時、彼なりに用語の定義・説明を加えた上で用いているが、その中で本稿に関係深い“情報蓄積検索システム”を構成する単位(構成要素)に関係する若干の用語をあげておこう。

著者記入、副出記入、基本記入等は今日理解されている通りであるが、書名記入(Title-entry)という言葉は標題(書名)の中の言葉「一部又は全体」を標目にとった記入という意味に解している。即ち初語よりの〔書名〕記入(First-word-entry), 〔書名中〕要語記入(catch-word-entry), 主題語記入(Subject-word-entry)はいずれも Cutter の考えた“書名記入”の下位概念である。²⁸⁾

Cutter はこれらのうち、要語記入を辞書体目録の中にとり入れるのに消極的である。ここで要語と言っているのは、書名中主題を示さないが、なんらかの意味で重要な語のことであり、この他に、主題語記入というものを考えている。これは図書の主題を示す言葉が標題の中に使われている場合に、これを取り出して標目にする記入のことである。いずれも、標題の中に使われている言葉を用いているので、現在の用語法では一緒にして“要語索引”と呼ばれることが多い。

図書の世界では Key word(直訳すれば鍵語または要語)といえ、もっぱら“見出し”の意味に用いられてきたが、ドキュメンテーション分野で屢々聞かされる Keyword out of context=KWOC 索引といった場合、ここにいう“要語索引”と変るところはないのである。ただ異なるのは、機械的に、電子計算機の手を経て編さんされたか否かなのである。

Cutter が言っている“初語よりの書名記入”(第一語

が冠詞である場合は無視する約束)というのは、副書名、別標題、部分書名などからとる場合にはそれぞれの書名の第一語から記入を書きはじめてゆくのである。その意味では「文脈を保っての」書名記入の一種とも言い得よう。1958年に IBM の H. P. Luhn によって考案された Keyword-in-context Index だとか、それ以前の「順列式」索引 (permuted title index) はしかしながら初語からだけでなく、途中の要語からの検索も可能にし、しかも前後の語句ともあわせ読みとすることが出来るようにしたものである。機械による編さんや印刷が索引完成迄に必要な期間を短縮してくれたことは、新しい可能性を生み出すこととなった。勿論この索引が成立する為の条件、「即ち著者・執筆者が適切な標題を、しかも基準になるような用語を用いてつけてくれる。」ということに対しては、チェックした追跡調査を行なっていくことは必要である。

これに関連しては L. Papier³⁰⁾ B. B. Lane³¹⁾ の報告等があり、我々の今後の調査によい方向づけをつけてくれているが、その解釈の点でまだいろいろと問頭点があるので、本稿ではそれに触れることをしないで、最も基本的な考察から、いわゆる新しい検索法と在来の検索法との比較を試みることにしよう。

VI. 主題索引と要語索引の特質

筆者は両者の相違を説明するのに主題目録と書名目録³²⁾との相違を思い浮べる。書名目録といっても、Cutter の言う書名記入、即ち初語よりの書名記入、〔書名中〕要語記入、〔書名中〕主題語記入の総てを含ませた意味での書名目録を考えている。

検索という機能を考えた上での、目録記入の標目なり索引語が主題をあらわす言葉なり記号である場合が主題索引といい、そうでない、その資料の中で用いられている語の中から選ばれている場合が要語索引である。書名目録に限定している場合には、例えば Cutter の用語法では、資料の中で用いられているといっても特にその書名(標題)の中で用いられている場合をいうのである。これを現在のドキュメンタリストが用いている言葉で表現するとすれば「主題索引は調整された言葉(または記号)が索引語(索引記号)となり、要語索引では文献語が索引語になっている。」と言われる。

検索されるべき個々の資料単位が相当大きい場合、そしてそれは蓄積される単位総数が比較的少ない場合にも通ずることであるが、文献語を索引語に用いるということ

は、その文献内容(著作)の著者名などを索引語に用いる場合と似たような使われ方をされる。即ちその資料の存在は、書誌なり引用参照なりその他口頭伝達により承知しているものを、確認したり借りだすために使うことが多い。

ところが、資料単位が小さなものまで探さねばならず、特に多数の資料が短期間の中に整理される場合には、文献語を索引語に用いる。特にその標題に用いられた語を使用するということは、主題索引の代用として用いるという場合が多くなって来る。これはその方法が有効であるということが最初から確認されてそうだったというのではなく、主題索引をそんなに早く作成するということが出来ないということからきた、いわば必要にせまられてできた手法乃至実験であった。これを実行していった上で、この索引がどの程度まで主題索引の代用がつとまるかを調査し、その程度を向上させる可能性を調査してゆくの、我々索引作成者(設計者をも含めて)に課せられた問題である。

ドキュメンテーションの発展とともにこの要語索引の用途に変動がみられるに至ったこと、それを可能にした条件は何であるかを考えると、それは次の二つにまとめることが出来る。

1. 書名とか論文標題をつける場合に、なるべく本文の内容を客観的に示すものにしたこと。いわば標題は、一文章に縮約された抄録であるとみなせるようにする方針ともいえる。
2. それぞれの分野で用いる用語をなるべく統一して用いるようにしたこと。これは、調整した用語と文献語が一致する度合が高くなるようにする方針とも言えよう。

勿論この様な条件が諸種の分野にそなわってきたというわけではない。最近特に発展してきた学問分野であるとか、沢山の難解用語(Jargon)が発明されたり、訳しだされたりする分野では、標題ベースの要語索引では同一主題の論文が分散してしまうので、主題索引の代用品として用いることは、不経済・非効率であろう。

この考察から当然予想されることは、標題のつけ方に、執筆者が注意を払うということが重要である。そしてそれは Weinberg 報告 *Science, Government, Information* (1963) にも指摘されていることである。そしてそのことは、科学技術専門分野であるとか、社会科学分野の一部、例えば PAIS (Public Affairs Information Service) などでは改善されつつあるといつてよい。しか

し、一方 F. Nansen の北極探險報告が “In Nacht und Eis” であったり、E. H. Hæckel が彼の自然哲学の体系の著作に “Welträtzel” と名づけたりすることを考えると、書名目録、要語索引というもののだけに主題からの検索を頼るわけにはいかないのである。筆者のこの論文に対して最初につけた標題は、“古き酒、新らしき酒、新らしき草ぶくろ” であった。その意図をくみとって、適当と感ぜられる読者も何人かはおられると思うが、そのような命題は、いま述べている要語索引用として不適当である。JICST の実験では、平山健三氏の論文標題 “弁慶は五条の大橋で” を処理するに際し、主題索引としての代用性を増すために、“パンチカードの限界” という他の文献語を補った。このような標題が頻繁におこる場合には、更に調整された言葉で補うという方向に進むというのも当然考えられる。東洋レーヨンが欧文論文に対しての索引を作る場合に、標題のあとに “/” を付し、その後に記述子をつけた上で KWIC 操作するようにしたのもその意味であろう。しかし問題はそうまでしていった場合に、最初に意図したこと、“機械的に素早く作成すること” がどこまで阻害されるか、それを反省してゆくことである。所詮 KWIC 形式とは、“とりあえずつけた索引” で current awareness 用のものであって、累積していったり、永久に使う索引ではないことをよく認識していなければならない。

1958 年に Luhn により提唱された KWIC 索引の出現以来、化学論文のみでなく、各種の学問分野での索引にこの様式が模倣され、その刊行物がある程度受けいれられているということは、この様式の成功を物語るものといえよう。

しかしながらこの方式を、日本語による、しかもドキュメンテーション関係論文の索引というものに応用したときにどのような結果になるかは、興味ある研究課題である。その意味で、261 名の利用者にアンケートを出して、KWIC 支持 19.2%、KWOC 支持 37.7% といった回答を得たということの解釈は慎重に行なわれなければならない。勿論そのアンケートそのものの合理性、信頼性をも含めてである。³³⁾

KWIC 索引の方式が各学問分野に於て模倣されて、それによる刊行物が30以上もあるが、それらの中で細部の点で Luhn の原案から異なったものについて紹介してゆくことは、ひいてはこの索引の問題点を指摘してゆくことにもなる。

まず最初に実施した *Chemical titles* 自体での改善点

からあげてゆこう。この変更は索引語形式そのものの変更ではなくて、この索引で検索した後の問題、即ちその論文（蓄積される資料単位）がどこにあるかの宛名とも言うべきコード、“認識記号” のことである。原案同様、文字と数字の両方の混用記号であることに変わりはないが、著者名又は機関名、出版年、書名といった要素を組合せてコード化していたのが、1962 年には読者の要望で、雑誌名、巻号、頁づけという具合に変更されたのである。³⁴⁾

非常に長い標題の論文が多いところでは、60字という制限である場合、標題がカットされる率が多くなり、利用者に不便を与えることは当然である。Bell Telephone 社では 120 字にまで拡大して索引を作成している。勿論 120 字にした場合でもカットされる標題が 2% も残るそうであるが、あまり印刷面に白い個所が残るのも歓迎されない。³⁵⁾

Biological abstracts がやっていることは原論文の抄録と結びつけるという意味で特徴がある。Current awareness ということだけが重点でない場合、この方式もまた歓迎する分野の研究者もあろう。Subject-in-context という意味をつけて通称、BASIC といわれているのがこれである。Cutter が書名記入の中で Subject word entry と称しているのと同じ発想である。Cutter の場合には現在でいえば KWOC 式になっているが、BASIC では、順列方式を取り機械を使用しているのはいうまでもない。ここでは更に、分散のあまりにも多い現実に対処すべく用語の調整にまで発展させている。

JICST の実験、東洋レーヨン(欧文)の場合、著者索引を別に付すことは紹介したが、著者名と一緒に組みこむ工夫も WADEX などでは試みられている。こうなると、著者・書名目録の“機械化時代” 版ともいえよう。機械はいくら同じような作業を繰り返させても、間違えるということはしないから、大量処理のためにはこの方式に限るというのであろう。

こういった異種のものも一緒にすることの利害・得失については数多の“分割目録か辞書体目録か” 論争でとりあげられたことがあるが、結局、利用者本位に考えてゆくということは次の事項を調査・検討してゆくことになる。

1. 分割された個々のシステムを使用する動機が劃然と分けられることが多いか否か。その利用回数の関係。
2. 合併することによってどの程度の重複記入が避け

られるようになるか。

次に、標題を、又は標題の転置形式だけを索引語にした部分についてもあまりにも繰り返えし、重複部分が多いということに対する処置はどうとすべきであろうか？この問題は、機械に総てを托している限りあまり大きな問題でないかもしれない。しかし機械に編しう、印刷させて“索引”の様な形で配布し、人間がそれから読みとるのであるとすれば、冗語は極力避くべきである。その意味で、ドキュメンテーション分野の人達の言う、いわゆる非重要語 (Non-significant word) というものを無視しようという考えは、Cutter が辞書体目録に繰り返すべき書名入のカードの中では、主題語記入の方を重視して、〔書名中〕要語記入を軽視したのと規を一にするといえよう。ただこの場合90年以前では、主題中心という思想が今日程徹底していなかった為に、Cutter は important word entry (重要語記入と直訳される) という言葉を Catch-word entry という言葉と相互交換的に用いたことが事態をやや混乱させることになったことは否めない。しかしながら今日においてなお、あるいは、一層のこと、非重要語というものに対する追求は困難になってきている。現在ではわずかに、Stop word (機械的に、採用を拒否してしまう語) といった範囲の語群として理解して解釈している。

いま一つの問題は、主題を表現している言葉ではあるが、あまりにも頻繁に用いられている語、いわゆる Common word というものを如何に処置するかという問題である。主題分類であるとか、範疇化するような場合には一束 100 (絶対数) 未満であるとか、総数の 5% 未満だとかいう実用的基準をたてることも可能であろう。しかし合成語からなる、また句で構成される複雑な主題などを検索するときのことを考えると、この普通語というものの処理もあまり簡単には考えられないのである。

要語、文献語に頼ったということからくる当然の結果であるが、同一主題の資料の分散ということが問題になるが、これに対しては、Cutter の主張した、参照付 (syndetic) というものをあてはめて解決してゆくより対策はない。調整された用語、シソーラス編さんというものの重要性が再び認識されだしてきたのもその故である。さきにも度々引用した JICST の人達の実験で“固有名詞異称リスト”といったものを付けたのもそれへの一道程であるとみられよう。

要語索引が主題索引の代用として用いられるということに関連しての問題点はまだまだ多い。特に日本語とい

うものを考えた場合に更にまた考究すべきものがあることは、JICST の人達がよく指摘している。この小論においては、索引者として留意しておくべき点として、Bernier の言を引用して、問題点指摘を結びたい。

索引者は、自分の言葉で行なうことも、文献語を用いて行なうこともある...しかし留意すべき点は、索引密度は主題の複雑性によって定まるといことである。そしてこの主題の複雑性とは、あくまでも、著者のコントロールの範囲であって、索引者や、いわんや出版者などが増減すべきことではない。³⁶⁾

(図書館学科)

- 1) このことに関連して、非常に一般的な言い方ではあるが、R. A. Fairthorne が分類表の問題について言っていることは注目に値する。Browsing schemes and “specialist” schemes. <Some problems of a general classification scheme, Report of a conference held in London, June 1963. London, L. A. 1964, p. 20.>

…唯一の解決法が存在するのだとか、適正な機械だとか、「打出の小槌」が存在するなどと信ずるのは有害である。主題索引、記述索引〔著者・書名索引を指す〕それからまた歴史的索引〔時代順配列の索引、引用索引、被引用索引等をも含めている〕その他を併用して、目標に達するのは当然である。

また M. Taube が *Computers and common sense* 1961 にも指摘しているように、電子計算機が魔法の機械でないことは十分に銘記しておかねばならない。図書館なりドキュメンテーション・センターにおいて、その機能を発揮させる道具にはなり得ても、万能薬ではないということを承知して、その限界容量と条件を求めてゆかなければならない。

筆者はさきに、図書館学会年報(1967)に“海外に於ける分類表の動向”を論じたが、その際に指摘しておいたことの一つは、分類表のノメンクレーチャー化傾向ということであった。所謂調整された用語による検索方式の作成では、件名標目表を用いての、記述子、シソーラスによる検索方式も、分類表・分類表の索引による検索方式もお互に歩みよってきて、同じところに行きつくのではないかとみた。この傾向の是非を言うのではなく、それからまた、この傾向に対してブレーキをかけようとの Custer 氏等の努力を無視するというのではなく、現状の診断としてそうみたのである。目録の世界、ドキュメンテーションの世界には、今一つの大きな水平化運動というものも認められてきているのである。そしてそれは主題目

- 録と記述目録の概念の差というものが、次第に觀念上のものだけとなり、実質的・機能としては一つになろうとしてきていることにみられる。Serendipity (A を探そうとしたが、B をみつけてしまい、それを役に立たせるということ) だとか、Browsability (悠々自適の態度で読みちらし、探しちらすこと。最初から定義づけられ、明細化された特定の目的を持った上での探索の対照的のことを指す。) ということが必要である、我々の分野では、この種の水平運動はいつでも、またどこでも、ついてまわることではあろう。
- 2) Olding, R. K. *Readings in library cataloguing*. 1966, p. 1-4.
 - 3) Lubetzky, Seymour. "Panizzi vs. the Finding catalog," *Journal of cataloging and classification*, vol. 12, no. 3, July 1956, p. 153.
 - 4) Strout, Ruth French. "The development of catalog and calaloging codes," *Library quaterly* vol. 26, no. 4, Oct. 1956, p. 270.
 - 5) Olding, *op. cit.*, p. 5-29. Report of the Commissioners appointed to inquire into the constitution and government of the British Museum. London, 1850.
 - 6) *ibid.*, p. 2.
 - 7) *ibid.*, p. 24 (Report 8867.)
 - 8) *ibid.*, p. 6 (Report 9862.)
 - 9) Jewett, Charles Coffin. *On the construction of catalogues of libraries and their publications by means of separate, stereotyped titles, with rules and examples*. 2d ed. Washington, Smithsonian Institution, 1853. 96 p.
 - 10) Henry, Joseph (1797-1878) 知識の増大とその普及を目標として設立されたスミスソニアン学会の初代事務局長。電磁気学者として著名であるが、むしろ巾広い教養の持主であったといえよう。ワシントンの哲学会、科学振興連盟などでも重要な役割りを果し、科学アカデミーの二代目の会長にもなった。子供の頃は勉強嫌いで、時計屋に見習奉公にやられていたが、16才で博物学の通俗書と親しんだのを契機に化学、生理学、医学、土木などに興味をおぼえたのだという。29才で数学の教師に招かれたときには受けるべきか否かに迷ったようである。しかしこの任命を受けたことが後日プリンストン大学 (New Jersey) の物理学教授になり、不滅の研究業績をのこすことになり、その後の研究管理者としての活動にも強く影響したといえよう。
 - 11) Jewett の叢書の扱いは、独逸書などによくある、標題紙 2 つの図書などに対しては、より一般的の書名の下にと、特殊の書名の下にと 2 つの目録記入を作り、後者の方には、総合書名の方の何巻であるかを明記する方法をとるように説明している。そしてこれは、NCR 1952 §43, 同 1965 §77 の様に、またアングロアメリカ規則 1967 §6B1 (注 9 参照) のようにと変ってゆくのである。
 - 11a) Jewett *op. cit.* p. 19.
 - 12) ここに Jewett があげている一日 40-50 という数字は今日では out-of-date と言うべきで、15-20 といった数字に訂正すべきであらう。それだけに、Jewett があの当時提案した計画が今日ではより緊急性をもって望まれ、幾分変更された型であるとはいえ実施もされている理由であらう。
 - 13) Collier, John Payne (1789-1883) はジャーナリストの家に生れ、シエークスピア学者、批評家として有名で、議会の書記としても *Times* や *Morning chronicle* の論説記者としても活躍した。死後、彼の偽版作りが暴露されたのは有名。
 - 14) Camden, William 1551-1623 歴史家、書誌学者。役職についたり、榮譽の称号を受けるのを拒んできた。1838年に創設された Camden 協会は彼を記念し、歴史的文書・記録の発行を行ない、1897年には Royal Historical Society に合併された。Olding, *op. cit.*, p. 15-17 (Report. 9788)
 - 15) Jewett, *op. cit.*, p. 21-22.
 - 16) こういった考え方、即ち規範法というものの性格を無視して、“ことさらに七面倒くさい規則を”と攻撃する研究者・理論家はどこの国にも多い。勿論その攻撃あってこそ規範法は育ってゆくのであろうが、前提を無視したり、効果の測定についての建設的提案を含まない攻撃では役にたたない。不幸なことに目録者の側の方にも、事態の説明に積極性が足りないのも事実である。“そのように考える人達に納得してもらふ努力をするのは、時間の浪費である。”“目録者でなければ判らないので、実務を通して会得させてゆけばよい。”という立場をとる人達が多い。ある著名な学者は次のように言っている。“Catalogers are sometimes asked, and justly so, why the catalog cannot be simpler. How can it be very simple when books are so complex.”
 - 17) Jewett, *op. cit.*, p. 22.
 - 18) Collier 氏は、一時間に 25 部の目録記入を作成したことを、何も特別に急いで行なった作業とは思っていないようである。ノルマなどきめられていたわけではない、という意味であらう。それは正しいかもしれない。しかし問題は、はじめに筆者が Strout 女史の言葉を借りていった「図書館の主たる目的は世界的の規模における書誌組織の形成」ということの重大性に対する認識なしに、既存規則即ち、専門職団体なりで今後育成してゆくことを前提に約束しあった体系を崩してゆこうとする態度にあるといえよう。この態度は何も前世紀の Collier 氏だけにあったわけではない。現代においても、日本においても、特にまた狭隘専門分野の学者によくみられる態度である。
 - 19) 誤解という言葉を用いるのは不適当であると言わ

れるかもしれない。ここはあくまでも、大英博物館の当時60万かあった蔵書を識別するということを目標とした場合を前提にしているのであって、自分の書斎の蔵書を整理することを考えているわけではない。

- 20) Jewett の報告についている事例集は約150の図書の見録記入からなっている。これは何も無作為の標本というわけではなくて、規則を説明するのに好都合な例として集めたものにすぎないが、それにしても、議会図書館所蔵の分は130部で、Smithsonian 学会蔵書は35、Yale 大学蔵書28を断然上まわっている。この事例集はABC順、参照付の形で作られている。各記入には識別用の一連番号がつけられており、Local index でそれぞれの番号の右欄に所蔵館の略号がついているので、両者を組合せると、総合目録の役目を果すことにもなっている。
- 21) Schwartz (1871) Edmonds (1879) などが文字と数字を組合せて著者を表現する記号法を提案したときに反対した Cutter も、時代と状況が変れば自から、著者記号表の編さん者をひき受けるといった成熟を持った人である。
- 22) Oldings, *op. cit.*, p. 33. なお Cutter のこういった考え方を裏書きしてくれる発言は著作のいたるところにみられる。例えば、

規則 340. 件名標目が同じもの同志では、更にそれを論題によってわけることが可能ならそうしたらよい。それが出来ない時に著者の名称を二次排列の手段に用いよ。

件名標目記入というものが書名記入の代用品である場合には、著者名のABC順で排列ということも意味があろう。しかしそれ以外では役に立たないというだけでなく、不適当ともいえよう。著者名が判明しているのであったなら著者目録で探したらよいのであって、何も件名目録の厄介になる必要はないであろう。それから著者名が判っていないのであったなら、件名標目の中では著者と並べてあるというのは何の役に立つのであろう。時によると著者の姓だけしか知らないで、Smith だとか、Jones, Müller といったありきたりの姓の著者の記入の山の中で探すよりも、件名である程度制限されている記入の中で、その著者を探すのは容易である、ということもあろう。しかしそんな場合はそう頻繁におこるものでもなく、また分類してあればそれでも解決つくことであるし、時代順排列の採用でも改善できることである。いずれにせよこのように例外的におこり得ること、本来の目標からはずれた副産物的利益で、目録設計の主要点をぼかすべきではない。…

規則 343. 同じ件名標目の下に多数の記入がある場合にはそれらを更に区別してゆくこと。但し細区分してゆく方法は避けるよう。

ここでいう細区分とは subdivide のことで、各国名のあとを例えば BSH における国家細目、地方細目の様に、——案内記(新訂版案では——紀行・案内記)のようなものを指している。避けよといっても絶対にというわけではない。Cutter 自身も Boston Athenaeum でよく用いていたわけで、出来るだけ避けようという、実際の都合からの禁止事項である。その中で Cutter のいっている言葉“二つ続けて細区分を用いることはどうしても避けなければならない。”も同様に、資料の数、その他の条件と勘案させて解釈してゆくべき発言であることは言うまでもない。言語(ギリシャ語)での分け方などを例にとり、一文法—アクセント、一文法—省略法 といったやり方をするよりは、むしろ —アクセント、—省略法、といった風に、たとえ体系順では深さの異なったことでも、一辞書、一文法 などと同位に扱うのが、件名としての在り方に近いと主張しているのである。

資料の量、記入の数といったものにも無関心に、しかも体系順での深さの程度に引きずられて、細区分(細目)を作ってゆくことは、結局は体系順目録(分類目録乃至ABC順分類目録)に対するノスタルジアに過ぎないから避けようではないか、との意である。

- 23) 特定の研究者に対する参考奉仕ということに重点をおいていたとしたら、Cutter の時代では、また別のアプローチの方を考えたであろうことも想像される。
- しかし20世紀も前半を経過し、主題の分散、資料源の分散といった具合に、情報分布の地図が変容してきた現在、Cutter の選んだアプローチは、研究者に対しても重要なものとなってきた。
- 24) 利用者、検索者によって、二種以上の探索動機がある場合、慣用を尊重しようにも二以上の形式が考えられる場合には、参照で解決すべきで、重複記入で解決すべきではないということも、実際家の Cutter として経費・能率のことを顧慮して当然のことと考えなければならない。
- 25) 学術用語としてきめている“参照不備”という訳は“十分にとのわない”という意味にも解されるので適当でない。
- 26) Oldings, *op. cit.*, p. 37.
- 27) I. F. L. A. *International Conference on Cataloguing Principles*. Paris, 9th-18th October, 1961, Report. London, 1963, p. 25.
中村初雄.“I. F. L. A. 目録原則国際会議”, 図書館雑誌 vol. 56, no. 5, 1962. 5, p. 257.
- 28) 主題語記入 (Subject-word-entry) とは別に、件名記入 (Subject-entry) をあげているが、此の方は標題の中から選ばれた言葉である必要はないという意味で、今日の件名標目概念と同様に理解してよい。
- 63) 両者の区別は観念的には可能であって、独逸語の場合には Stichwort と Schlagwort としている

が、実際には区別しない人が多い。主題語記入という件名記入と同視してしまう人もいる位である。

- 30) Papier, L. "Reliability of scientists in supplying titles; Implications for permutation indexing," *Aslib proceedings*, vol. 15, Nov. 1963, p. 333-5.
- 31) Lane, B. B. "Keyword in-and out of-context," *Special libraries*, vol. 55, Jan. 1964, p. 45-6.
- 32) 索引と目録のちがいについて。

前にも触れたことであるが、特殊化と分化をしてゆき区別することの好きな人達は、索引という概念と目録という概念とを全く違ったものとして解釈していることが多い。

機能としては、資料（特にその中に含まれる内容）を案内してくれるという点では同一である。ただその資料の単位が、図書そのものであるか、雑誌中の独立した一部分ともいうべき論文だとか、個々の断片（章、節、文、句、語）であるかによって使いわけることが多いようである。しかしこれとても、ローマン・カトリック教会の如くに、案内される単位が図書である場合にも“索引”と用いることもある。また別の人は目録には案内するという機能だけでなく、案内したものの明細書きという意味もあると主張する。しかしこれとても、巴里原則の会議で盛に討議されたことであるが、書誌としての機能は離れて、専ら検索の道具としての面に全力を注ぐべきであるという傾向が増してくるときに、両概念を区別のためのクライテリアとしてとるのは不適當になろう。このことは印刷、複製の技術が進歩して、遅れがたいして問題にならないように複製が可能になり、その分配がスムーズにゆくようになるに従い、目録と索引の区別は用語習慣上の区別だけになってしまふであろう。

- 33) このアンケートは、JICST の“日本語による標題索引技術委員会”の実験資料（1967年3月）に報

告されている。質問を受けた対象 261 名は理工系の人が約半数、法文系の人が 4 分の 1、図書館学の人には 20 分の 1 といった割合であるが、その中で 125 名は索引を作成した経験者である。実験材料として提供した索引は“情報管理”第 1 巻から第 8 巻までの 567 論文（執筆者は 157 名）を蓄積したものである。書誌リスト（コンテスト・シートに論文認識番号がつけてあるものと考えればよい）9 頁、著者索引 3 段組 1, 3 頁、は共通であるが、索引記入の形式を KWIC (24 頁) KWOC (32 頁) 2 通りに編成したものを使用した上で解答を求めている。回答肢は、従来の Subject Index (支持 13%) KWOC (38%) KWIC (19%) どちらともいえない (23%) の 4 肢であった。無記入が 7% あったのはやむを得まい。この質問の前に、“KWIC 索引は従来の Subject Index と比較して使いやすいと思いますか”という準備質問をしているが、その時の解答は、わからない 48%, 使いやすい 22%, 使いにくい 15% となっている。

- 34) Fischer, Marguerite. "The KWIC index concept: A retrospective view," *American documentation*, vol. 17, Apr. 1966, p. 64.
- 35) この点を更に拡張したものとして、索引とは言えないかもしれないが、電々公社の電気通信研究所で開発した検索システム、Rewdac (Retrieval by words, descriptors and classification) がある。これでは一文献当りの記憶語数を 100 語（一語は 6 字）にしている。論文名は 20 語 (120 字) にしてあるが、それを越える分は備考欄に 15 語分とってあるのを流用することにしてある。それ以外の索引語としては、著者、所属機関名各 3, 3 語宛 (最高 108 字)、その他に UDC 記号用 5 語分、特殊分類コード用 3×3 語分が用意しあるという。
- 36) Bernier, Charles L. "Indexing process evaluation," *American documentation*, vol. 16, Oct. 1965, p. 324.